

福祉の里

閉科に寄せて

同窓生及び関係者からの便り

20年間の歴史に感謝

そして、福祉の里としてスタートする

これからの絆に思いを寄せて



「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

社会福祉法人松竹会
障害者支援施設 シーサイド吉前
所長 七原規充

今回、福祉事業発展のために寄与されてきた、豊橋創造大学短期大学部専攻科福祉専攻が閉科となると伺い、今まで実習あるいは、就職などを受け入れてきた事業所として、大変残念でなりません

当施設に就職された卒業生のみなさんには、相談業務や介護業務など将来の幹部候補として中心的な役割を果たしていただき、大いに囑望されているところですが、後進の道が閉ざされたことは我々にとっても痛恨の極みであります。

しかし、これから益々福祉人材が不足する中での閉科は、大学関係者の皆さまにとっても断腸の思いであったことと推察され、様々な動向を考慮すればやむを得ない措置であったとも思います。改めまして関係者の皆さまには今までのご尽力に感謝を申し上げます。

実習生から教えられることは多々あり、実習が施設にとっても改善、成長の機会でもありました。学生の皆さんからの素朴で率直な指摘にこそ、施設が抱える問題点が潜んでいることが多々ありました。

創造大の実習生のみなさんは、礼儀正しく、真摯な気持ちで実習に取り組まれていました。教員のみなさんも大変熱心に指導されていたことが印象に残っています。

専攻科は閉科になっても、創造大のみなさんとはこれからも様々な場面で親しくお付き合いができたと思っています。また、福祉にご興味のあるある学生さんがみえましたら、ぜひ就職もご検討いただけたら幸いです。

最後になりましたが、創造大学並びに短期大学部の益々のご発展を心よりご祈念申し上げます。

「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

特定非営利活動法人てのひら
代表 大石政和

私は平成14(2000)年3月、専攻科福祉専攻が開設される年に豊橋創造大学短期大学部幼児教育科を卒業いたしました。幼教第一期目の社会人入学した男性学生で「1年間しかなかった幻の大林ゼミ」に入り、卒業時に専攻科が開設されると知り、進学か就職か悩んだ記憶がございます。

現在は、2010年に福祉仲間と視覚障害者を対象に「特定非営利活動法人てのひら」を立ち上げ、就労継続支援B型事業(視覚障害者就労継続支援施設 陸)、豊橋市視覚障害者歩行訓練事業に携わっております。

卒業して10年後、法人設立を大林先生に報告に行くと、視覚障害に特化した支援事業に着目したことに理解を示してくださり大変喜んでくださいました。それ以降、専攻科福祉専攻の学生の皆様とご利用様様が毎年関わるようになり、今では「今年は、そろそろ学生さんが来る時期じゃない?」とご利用様から言われるくらい定着した楽しみの一つとなっていました。コロナの影響で社会全体の活動制約をもたらしていますが、視覚に障害のある方にとっても、不安ある生活が続いています。

そのような中で専攻科福祉専攻も今年度で閉科との事で大変残念に思います。

大学にお邪魔しご利用者自身からの生活の実態、視覚に関する疾病、手引き歩行体験を行い帰路に於いて利用者(視覚障害者)自身が良い時間を過ごすことができたと話され、ご利用様による「社会的啓発活動」になって満足されていたことを今でも大変嬉しく思っています。また、年に一回行う日帰りの旅行にも参加してもらいました。その時のお天気やバスの中での思い出を大変楽しかったのか、今でも利用者の皆様の話に出ることがあります。

「サツマイモの苗付け」「災訓練時に電機ポットでのパッククッキング調理」等、思い出すことは沢山あります。一つひとつが貴重な機会であったと今なお改めて感じております。閉科は、致し方ないところですが、常時人材不足の福祉業界にとって貴重であった若い専門的知識をもった人材育成を行う場所が無くなってしまふことは本当に残念でなりません。

今後は専攻科福祉専攻がなくなっても、私は豊橋創造大学短期大学部の卒業生として福祉の現場にいるとコミュニティを築く機会を大学にも求めていきたいと思っております。

2022年1月

幼児教育・保育科大林博美ゼミ卒業生 大石政和

「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

NPO 法人 高齢者住まいる研究会
理事長 寺西 貞昭

私は、専攻科福祉専攻が幕を閉じると伺い、非常に残念でなりませんでした。なぜなら、保育や介護現場で災害から自分の命や大切な人を護る福祉人材教育ができると非常に期待をしていたからです。

専攻科福祉専攻の学生さんとは、6月の実習前と実習後に遠隔授業(現在、熊本県高齢者施設で勤務)で2回、「福祉施設のリスクマネジメント」の授業でお目にかかりました。

そこで、「就職をするならハザードマップで安全な地域かどうか」を把握することがこと！」と話をさせていただきました。「就職する前、選択できる権利を行使して、防災に生かすことができます。つまり、危険な場所にある施設には就職しない選択は最大の防災策！早晚、施設は危険地域の立地に対して安全な場所への移転を考えざるを得なくなるかもしれない。未来の利用者と職員、地域のための立派なアクションになるといえるかもしれません。」とお話をしました。災害を他人事のように感じてしま傾向にあり、我が事的生活や人生と結び付けにくいので、目の前の就職とつなげてみました。

我々は、日本災害福祉楽会のホームページでは、「災害は日常生活をする上で突然降りかかってくる。自然災害は私たち日本人が想定する以上に怖いものです。災害に対する意識が日頃から少なければ、それだけ被害は拡大するかもしれません。可能な限り万全な備えや意識さえあれば被害を最小限にとどめることができるかもしれません。最小限に留める手段として、私たち自身の災害に対する意識を高める、あるいは、災害をイメージできるツールを活用することで”災害に強い人・組織・地域”を作り上げることができるのではないのでしょうか？」とあり、災害は、介護者も介護される側も被災者となり、人生や生活を一変させてしまいます。「災害に強い福祉職」づくりは、地域づくりでもあります。

日常でも災害時ならなおさら誰もが一人で生きていくことは困難だということです。また、自分の命は誰かにとって大切な命でもあることも忘れないでください。後は、ようやく来年度から3年かけてBCP(業務継続計画)が義務化されます。

専攻科福祉専攻の閉科後は、「災害に強い福祉職」「リスクコミュニケーションができる福祉職」として、異なる現場から現実的かつ困難な課題等の情報交換、勉強会等、ぜひ一緒に広域でつながっていきましょう。きっと、なにか元気とヒントが見つかるはずです。楽しみにしています。(^^♪

「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

豊橋創造大学短期大学部
元教授 藤本 逸子

介護福祉士の養成を行っていた専攻科福祉専攻が幕を閉じると聞き、非常に残念でなりません。介護福祉士の国家試験の受験資格を得る方法は複数ありますが、短期大学等で保育士資格を得た学生が1年間みっちり学ぶことによって、介護福祉士国家試験受験資格を得ることは、大きな意義があるように思います。

保育士資格を得る学びの中で、福祉の心とは何か、成長・発達とは何か等を理解します。その上で、介護に関する学びをすることで、介護に対しても、保育に対しても、人間の一生を見据える視野の広さと福祉への洞察の深さが発揮されます。これは、なかなか得難いことです。

豊橋創造大学短期大学部専攻科福祉専攻の大きな特徴は、学びの集大成として、ケーススタディの研究発表会を公開で行うことです。学内の学生・教職員だけではなく、学生が介護実習でお世話になった施設、また、卒業生の就職先の施設の職員の方々にお越し願って、学生の発表をお聞きいただき、ご意見・ご質問・ご指導をいただきます。ご参加くださった施設職員の中には、施設内の新人介護士を指導する立場となっている頼もしい本学専攻科福祉専攻卒業生もいます。

学生が発表するケーススタディは、ICF（WHOにより制定された「生活機能・障害・健康の国際分類」）を用いて、利用者さんを多面的に理解するところから始まります。学生の発表を見ると、学生の頑張る力、努力する力を強く感じます。その力を引き出す、大林先生をはじめとしたご担当先生方のご指導のきめ細かさと情熱を感じます。多くの時間と心かけた成果だと思えます。

ICFを知らない介護福祉士はいないと思えますが、ICFをここまで理解し、日々の介護に生かすことのできる介護福祉士はそれほど多くはないと思えます。これは、豊橋創造大学短期大学部専攻科福祉専攻の「宝」です。誇りに思います。このような学びができた本学専攻科福祉専攻の学生は幸せです。

しっかりとした介護の理論的抑えと理解、実践的技術と福祉の心を身につけた卒業生が、介護福祉士・保育士として愛知県と静岡県を中心に活躍しています。嬉しいことです。社会貢献のリーダー的存在として、これからの日本の福祉を牽引していってくれることでしょう。

「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

非常勤講師 浅井康吏

私と専攻科との出会いは、早 20 数年前に遡ります。初めて出会った場所は、当時勤務しておりました、特養でした。その時の事は、今でもはっきりと覚えております。まだ、介護福祉士として数年目ではありましたが、実習生を教える立場でもありました。

第一期生を担当してから、その後も携わらせて頂きましたが、総称して言えることは、「個」はあるものの、皆が介護福祉士を目指す上で、とても前向きであり、勤勉であり、素直である事を感じました。これは、私のように専門学校で二年間学んだ者と、短期大学を卒業後に、新たな「志」を抱き、一年多く学んだ者との違いが明確であり、意欲の差と申しますか、精神的なゆとりさえ感じました。又、専攻科の教授が私も大変お世話になった事のある、恩師「大林教授」であった事も、親近感を覚え、運命をも感じました。

さて、月日の過ぎるのは早いもので、それから約 20 年が経過しようとしております。以前は一介護福祉士としての立場であった私も、勤務する法人も変わり、一事業所の事業長を任せられる立場に変わりました。

先の社福を退職した後、しばらくの間、大林教授と疎遠になった時期もありましたが、平成 28 年よりひよんな事から再開できました。その時の思いは、「先生昨日もお会いしましたか？」と勘違いするほど近くに感じました。(笑)

その様な事から、今度は事業長として専攻科の学生を迎え入れる立場となりました。それも幾期生共、私が実際に担当していた頃と全く変わりなく、皆がしっかり教育されており、改めて嬉しく感じました。

その一部の学生は、現在私の直属の部下でもあります。一生懸命熱意を伝え教育した学生が、私たちに共感し、共に過ごすという事は、何故にも変えられない嬉しさであると感じております。

さらに、平成 30 年度からは、思ってもみなかった、教員となりました。様々な立場で、各学生を見てきた中でも、やはり「しっかりしている」事は変わりなく、皆が「一人の大人」として立ち居振る舞いが出来ておりますし、私自身も、教育者としての立場で関わる事が、人生の成長に繋がっているのではないかと感じており、その位大切な時間でした。

しかし、この期を持ち閉科となると伺いました。短期大学卒業後に介護福祉士が取得できる学校がなくなってしまう事、それに合わせ、素晴らしい学生達を生み出した貴学の教育体制、それらが失われていくという事、それは、とても残念で、寂しさを覚えます。

最後にはなりますが、専攻科福祉専攻を卒業されたすべての学生と在学中の皆様がこの後の日本の福祉を盛り上げて頂くことを切に望むと共に、益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

さようならは言いません。どうもありがとうございます。またお会いしましょう。

「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

非常勤講師 野口恵美

「教えることは、学ぶこと」

77歳の今日まで看護・介護教育に関わらせていただいた私の思いです。もし、介護の学生に接しなかったら、私は医療の看護のみの体験に終わっていたでしょう。

介護教育に関わらせていただいて、何かが変わったのです。

それは何でしょうか？

病院の看護をしていた私は、患者・家族の皆様から学ばせていただきました。病気を持つ人間を看護するということは、病気の知識だけではなく、病気を持つ人間とのお付き合いをすることになるため、自分の知識や体験の限界を感じました。雑誌・新聞・書物では学びきれない多くの患者さんや家族との出会いがありました。

豊橋創造大学短期大学部専攻科福祉専攻では、以前私と同じように医療現場で看護師としていた科長の大林氏との出会い、介護福祉士教育に携わり、看護教育にはない魅力を感じました。今では、専攻科福祉専攻の非常講師の立場から養成教育の学会に参加し、本当に社会のニーズの高い介護の教育の重要性とその価値を看護教育側にも知らせたくくなりました。

専攻科福祉専攻では、コロナ禍で遠隔授業に大変苦慮しました。

しかし、看護・介護等は、対面でしか伝えきれないことがたくさんある！と改めて感じました。将来、介護を受ける身として、いかに、人と人とのぬくもり、やさしさ、思いやりを持ち続ける人材が必要かを実感しています。専攻科の学生はそんな素晴らしい人材に育つと信じています。

教えることは、学ぶこと、そんなことを77歳まで感じられる機会に出会えた専攻科福祉専攻に感謝しています。ありがとうございました。

「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて

非常勤講師 平松靖一郎

私は、今、聴覚障害者福祉の向上に取り組んでいます。専攻科福祉専攻の授業では、開設当時から、様々な行事に関わらせていただきました。その分、沢山の思い出があります。また、私の聴覚障害者福祉に取り組む思いや考え方に変化を与えてくれる、素敵な出会いや体験がありました。

私が「手話」に出会ったのは、本学に在学する難聴学生を支援したいという学生が学生課に相談に来てくれたことがきっかけです。それまで、意識したことなかった「絵」や「文字」による情報の大切さ、「音声」中心で提供される情報の多さなど、意識したことなければ、気付きもしませんでした。

しかし、その学生との出会いがきっかけで、「福祉」って何だろう。「自分にもできることがあるのではないか。」と考えるようになりました。そう考えるようになった頃に「手話」と出会い、「手話」を学び始め、「福祉」を学び始めました。そして、ほどなく、豊橋創造大学短期大学部に専攻科福祉専攻が開設されることになり、以来、多くの専攻科福祉専攻の学生と関わらせていただきました。

まちのボランティア講座に通うと、「福祉(ふくし)」は、「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせにするために、アイデアを出し合ったり、手や足を使って汗をかいたりして、『生活を良くしよう、困ったことを解決しよう』とする活動です。と聞いたことがある人もいないのでしょうか。「聴きたくても聴こえない!」「伝えたくても聞こうとしてくれない!」「伝えようとする気持ちを示してもらえない!」。大規模災害が発生する度に、こうした声を耳にします。私たち一人ひとりが「気付くこと」「気を配ること」で世の中は、変わっていきます。誰もが、「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせにするために、その一歩が踏み出せる人が増えていけば良いと思って活動しています。

私にとって専攻科福祉専攻は、「障害の理解」や「コミュニケーション支援技術」の授業を通じて、こうした「福祉(ふくし)」の心を育む学生を目の当たりにする機会を与えてくれました。医療・福祉・介護の仕事は、尊いものだと思います。また、福祉活動も終わりは有りません。関わり続ける限り、私たち自身も成長させてくれます。

専攻科福祉専攻の卒業生は、これからも、私たちの仲間です。私たちが「生」ある限り、これからも一緒に「福祉(ふくし)」の心を実現していけることを願いとして、皆さんに yell(エール)贈りたいと思います。

「専攻科福祉専攻の閉科」に寄せて ～2005年福祉情報「浴衣着付け教室」から16年経て思うこと～

山野流着付け教室 着付師 手塚照子

2005年9月17日に、豊橋創造大学短期大学部専攻科福祉専攻の「福祉情報展」の「浴衣着付け教室」の企画に参加させていただきました。学生さんをスタッフとして様々な障害のある方、健常者、老若男女問わず、市内、名古屋、東京からも来校なさっていました。

障害をお持ちでも、車椅子ダンスをなさっている方に、お振袖を着付けしたりして、そのままの格好でダンスをしたら素敵だろうと思いました。また、障害をお持ちになって写真撮影が趣味とされていた60代の方も、一度は来てみたかった若々しい色柄のお着物を選ばれて、にこやかにカメラにおさまる様子は、私どもも知らぬ間に、笑顔になって、参加させてもらって、エネルギーをいただきました。また、下肢の不自由な男性に浴衣を着ていただき、校内を回ってもらいましたら、終了時間近くまでもお戻りにならず心配をしましたが、「着物がこんなに着心地がよいとは全く知らなかった。驚いた。」とお聞きし、皆で顔を見合わせて「やったね!」と。私どもは、大学様のこうした機会によって、山野流着物教室としての活動の一つとして、「あらゆる人に平等に着物のよさ」を伝える着物師としての使命ややりがいを感じることができ楽しい時間を過ごさせていただけた思い出の1日でした。

あれから16年を経て、2021年6月17日に、今度は学生さんに、浴衣の着付けと障害のある人の着付けを行うことを目的に来校させていただきました。コロナ禍の中で、着付け教室は口頭で伝えるのは難しい場面も多く、少しの時間でしたので車椅子着付けの手助けができたか不安でしたが、学生さんの意欲ある姿勢にまず驚きました。1回だけで浴衣の着付けができたことは、実際に「着せてあげたい」という温かい気持ちがあるからだと思い、またもや、新しい感動をさせていただき感謝申し上げます。

専攻科福祉専攻は、16年経ても変わらず、学生さんたちを豊かな教育をされ福祉の世界に送り出されてきたのだとしみじみ感動し、専攻科福祉専攻の学生さんは、幸せ者だと思いました。

しかし、今年度で廃止になることを知りました。これからの時代、今以上に介護の専門職の人の活躍は求められます。保育士資格を持ち、介護福祉士を持つ方の輩出がこれでおしまいとは、大変もったいないと思います。公私を問わず「保育」「介護」は必要ですし、どちらの道を選んでもレベルの高い大人の「保育士」、豊かで寛容な「介護福祉士」が育っていくと思います。きけば、東海5県では、唯一の大学での専攻科の介護福祉士の養成課程、大学の人材育成が閉ざされてしまうことを大変残念に思っています。これからは、専攻科の在校生や卒業生が大きな財産として、後進の人々へのアプローチをしていくことを期待しております。コロナ禍の続く中で、医療職の看護師の活躍ばかりが目立ちますが、同様に介護の重要性が必然となります。その価値を理解できる皆さん、誇りをもって社会的な活躍を希望します。

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

私は専攻科福祉専攻の1回生の村上実奈です。専攻科を卒業と同時に現在の施設に介護職員として就職し、その後現在の教育・研修事業所に異動しました。仕事内容は、新人職員の研修、法人内職員の研修(法人すべての部署対象)、介護福祉士養成実習の受け入れ等です。専攻科には卒業生として、授業の一環で現場の話をさせていただいたり、時には非常勤講師として学生さんとかかわる時間をいただけてきました。

私にとって専攻科は介護の原点を教えてくれた場所です。1年という短い時間の中で、介護現場の現実に触れ「尊厳」について深く考え、施設で過ごしているご利用者の切ない思いに触れ、20代~40代という幅広い年齢層の同級生と共に学び、多くの先生方の熱い思いのこもった授業を受け、専攻科で過ごした時間は今でも楽しくもあり、切なくもあり、輝いている時間です。

専攻科の学生さんの大きな特徴は、幼児教育・保育を学び、厳しい実習を体験した経験があることから、ご利用者へのまっすぐな愛情と、優しい笑顔と、ご利用者の尊厳を大切に思う姿勢が身についていることだと思います。実習受け入れ担当者として、また、専攻科の卒業生として、「尊厳」を常に大切に考えられる人になってもらいたくて学校でも、現場でも学生さんに「ご利用者の声」を届けてきました。専攻科で学んだ学生さんたちは、福祉に対する倫理観をもってくださっていると信じています。卒業して、それぞれの社会に出ていき、なかなか顔を合わすことができないですが、卒業生がそれぞれの現場で元気に頑張っているだろうと思い、自分自身も頑張っています。私の原点である専攻科福祉専攻がなくなってしまうことは、仕事で辛いとき、苦しい時、相談出来る場所がなくなってしまうことのように思え、とても寂しく感じました。しかし、前を向いて歩いていくために、みんなが集える新しい場所を作り、交流を続けていけたらと考えています。専攻科福祉専攻の卒業生の皆さん、最後の卒業生となる学生の皆さん、また、お会いできる日を楽しみにしています。その日までお元気で……。

2021年12月

1回生 村上実奈

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻 1 回生の今泉真理子です。

“赤ちゃんから高齢者・障がいをもつ人へ、やさしい人になりませんか？”
当時、幼児教育・保育科に所属していた大林先生からのゼミ生募集プリントに引き寄せられるように大林ゼミに入ったことから始まりました。

「もっと福祉について学びたい」と思い、大林先生と専攻科福祉専攻開設と同時に進学。

大林先生をはじめとする先生方の熱意溢れる講義、年齢もキャリアも異なる幅広い年齢層の同級生との学び、介護現場での学びがありました。

専攻科で過ごした日々は、人生の中で1年という短い時間でしたが、私にとって大変貴重な時間となり20年経った今でも鮮明に覚えています。

卒業後、福祉施設にて従事していましたが、医療の知識と技術を学びたいと思い、看護大学へ進学しました。看護学生時代、小児・母性看護では幼児教育・保育科で学んだこと、老年・精神・在宅・地域看護では専攻科で学んだこと、全ての点と点が線で繋がるように、どの学びも私にとって必要であり、学ぶ順序も必然であったと思います。

20年間看護職として介護福祉士の養成施設に関わってこられた大林先生は、“生活や人生に出会うことのできる医療が大事。福祉職は人間の潜在的な力を引き出しながら生活と人生の質を向上させることができる”と仰っていました。

保育と介護と看護を学んだ専門職として“子どもから高齢者の発達支援”は、健康のどの段階においても必要であると思います。

医療は病気を治すことを第一優先に考えがちですが、“disease(疾病)”をもつ“patient(患者)”という視点から捉えていくべきだと思います。

非常勤講師として専攻科の学生さんと関わる貴重な時間もいただき、大変感謝しております。

仕事で壁にぶつかった時、初心に戻りたくなる時、大林先生に会いたくなった時、大林先生の研究室を訪ねていました。

専攻科が閉科になるということは、私にとって大好きで大切な居場所がなくなってしまう気がして大変寂しいですが、専攻科福祉専攻で学んだことを糧に今後も私らしく地域貢献できるよう日々、精進して参ります。

また今後は、福祉の里のなかで皆さんと交流をさせていただきながら新たな居場所づくりが出来たら…とっております。

皆さんとまたお会いできる日を楽しみにしております。

ありがとうございました。

2022年3月

1 回生 今泉真理子

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

この度は、20年続いた専攻科福祉専攻の歴史が終わることを大変寂しく思っています。

私は、2回生になりますので、今から約18年前に入学しました、当時は、10名のクラスメートがいて、20歳から50代の幅広い年齢層で構成されていました。私が専攻科福祉専攻に入学した理由は、子どもが高校生になり、私も何かにチャレンジしたいと思い介護福祉士の資格を取ろうと思いました。義弟が豊橋創造大学に勤めている縁で、専攻科福祉専攻を身近に感じ社会人入学をしました。若いクラスメートと机を並べて勉強し、毎日があっという間に過ぎた充実した一年でした。

卒業後は介護老人福祉施設で正職員として働き、夜勤もやってみましたが、家庭との両立が難しく退職しました。その後は、パートで介護の仕事を続けました。その甲斐もあって、ケアマネジャーの資格も取り、約1年前まで、パートでケアマネの仕事をしていました。専攻科から始まった介護の道ですが、人生というものは、チャレンジすること、思い立ったらやってみること、そういった思いが、人生を創るものだと思います。

こうした、思いを大事にしてくれたクラスメートや先生のサポートこそが、今の自分につながっているといたっても過言ではないと思います。

18年前と変わらず、大林先生は、専攻科福祉専攻にいてくれることがうれしいです。専攻科での、大林先生の熱心な授業は今も忘れません。社会に出るといろいろな事があり、勉強した事と、介護現場とのギャップも大きく、思い悩むこともあると思いますが、目の前の事をひとつひとつクリアーして下さい。介護の仕事が続けていくと良い事もたくさんあり、得る事も多いです。在校生の皆さん、頑張ってください。

最後に、大林先生に出会えて良かったです。大林先生、有難うございました。

2022年1月

2回生 平松尚余

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

4回生の大竹です。

私は、高齢者施設に勤務していた時に、よりよい介護福祉士を目指したいと思ったのがきっかけで、30代に入って専攻科福祉専攻に入学しました。

学生一人一人と丁寧に向き合ってくれる素敵な大林先生や20代の年齢の違う同級生がよい介護がしたいという夢を持ち、互いに高めあうことのできるクラスメートに出会えて、とても充実した大学生活を送ることができました。

特に思い出すのは、障害のある方々や高齢者の社会参加の場を大学内外で行った「福祉情報展」で、脳性麻痺などで手が不自由な方の絵を集めた「こころの創造展」、「障害のある方の着付け教室」等でした。

この企画は、大林先生が看護師であったことから、病気は治って退院しても、地域社会で生き生きと生活をしづらい人生を送っている人との出会いから、医療は命を救うけど、福祉はその人の生活と人生に寄り添うことができる。と言われたことを胸において福祉の仕事を誇りに感じています。

専攻科はたった1年でしたが、介護の現場から離れてみて、現場で学べない人間の可能性や価値を利用者の方の持っている悲しみや喜びの気持ちに寄り添う気持ちに気づくことの学びから、自分が変化していきました。

介護に必要な知識・技術だけでなく、自分に介護観が養われ、介護とは何か、を深く考えられるようになりました。

卒業してからは介護だけでなく、新生児から高齢者・障害者自身や家族に対して幅広く対応できる援助者を目指せるきっかけになりました。

現在は、産婦人科で小児分野を扱う保育職についています。来年度から、専攻科が20年目にして廃止になって、先生方までいなくなると思うと、その存在を失うようでとても寂しいですが、いい先生、いいクラスメート、いい学びに出会え、いい専攻科で学べたことは、本当に私にとって良かったです。大変感謝しています。ありがとうございました。

2021年4月

4回生 大竹由夏

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

8回生の嶋みはる (旧姓：吉田)です。

私は専攻科を卒業して10年経ち、今は訳あって専業主婦をしています。

専攻科に入学したきっかけは高校時代のホームヘルパー研修です。元々福祉に興味があり、ホームヘルパーの資格を高校で取れると分かり、即応募しました。その時はいつか福祉の仕事が出来たら良いなあというくらいの気持ちで取得し、大学は幼児教育・保育科に進みました。

そこで専攻科福祉専攻の存在を知り、幼児教育よりも福祉に従事したいと思い、専攻科福祉専攻に進みました。

専攻科福祉専攻では実習で様々な施設に行きましたが、特に障害者施設が印象に残っています。その施設では、担当させて頂いた方の娘さんへのクリスマスカードを作りました。

その娘さんは目が見えない方だったので、立体的な物を作りたいとおっしゃりどういった感触なら分かりやすいかを一緒に考えました。

その中でも「娘は星が好きだから」とか「この色なら娘も分かるかなあ」など、娘さんの事を考えている利用者様はとてもイキイキしていたのを覚えています。

やっぱり、施設に入所した後も家族との繋がりを大事にしていける介護福祉士になりたいと思いました。

卒業してから、病院・特別養護老人ホームと2か所勤めましたが、場所が変わっても介護福祉士の信念は変わりません。常に「利用者が望んでいることは何か」を考えることです。業務に追われると利用者様の事よりも自分本位になりがちです。

そんな時は、専攻科福祉専攻で気づいた事、習った事を思いだし、本当に人間が生きていくときに大切な事はなにか、家族と離れて暮らして介護を受けざるを得ない人の思いを考えながら真の介護業務に当たって下さい。

2021年12月

8回生 嶋みはる(旧姓：吉田)

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

10回生の伊東斗仁です。

卒業して特別養護老人ホームほなみ会で勤務して8年になります。私が介護の業界で実際に働いてみて、正直良かったことよりも大変だったり辛い体験の方が多いです。皆さんもこれから先どのような現場で働く事になるか分かりませんがたくさん辛い経験をすると思います。私は辛くても頑張れとは言いません、周りに相談するのも良いですし、合わないと思ったら思い切って仕事を一度辞めてしまうこともありだと思えます。これから先色々な事があると思いますが一度きりの人生なので、後悔のないようみなさんの道を歩んでください。

2021年12月

10回生 伊東斗仁



専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

10 回生の岡本(旧姓：笠原)です。

卒業後、社会福祉法人天竜厚生会にて就労継続支援 B 型で 3 年、特別養護老人ホームの立ち上げをし 5 年、計 8 年勤めました。現在は結婚を機に退職し埼玉県で子育てをしております。

就労継続支援施設では利用者様の作業支援だけではなく、利用者様の作業に繋がる営業業務もあり難しさも感じながら諸先輩方に支えられ充実した日々でした。

4 年目に異動があり特別養護老人ホームの立ち上げメンバーになり学校を卒業してから時間も経っており不安もありましたが体が覚えていました。

ご入居者様との時間は 1 日 1 日が濃く、その人らしい生活とは……どんな暮らしだったのか……など考えて一緒に過ごし最期まで充実した人生を送ってほしく支援を行っていました。

これから福祉の世界へ入るみなさん。

最初は不安ばかりだと思います。私もそうでした。不安は皆が通る道だと思いますが その不安を先輩に相談してみてください。無理せず自分のペースで自分らしく仕事をしていってください。

2021 年 12 月

10 回生 岡本(旧姓：笠原)麻央



専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

10回生の松本です。

創造短大を卒業して、静岡の天竜厚生会に勤めております。高齢者施設に6年、そして現在は救護施設2年目になります。仕事をする中でやりがいを感じる事が2つあります。1つ目は人生の大先輩の優しさ、おおらかさを、感じる事が出来る所です。仕事に就く前は内心介護職か…という感情があり、あまり良いイメージが持てませんでした。

しかし実際に働いてみると想像以上に高齢のご利用者様の心のおおらかさ、優しさに日々触れることができることに、喜びを感じるようになりました。今の高齢者の方は戦争や震災などの苦難の道を通ってきた方々であり、現代の若い世代にはないおおらかさを持つ方が多いと感じました。そんな大先輩の経験談を聞くことや、生活歴を知ることが、他の職種では味わえない大きな学びとなっています！

2つ目は自分が行った支援で何かができるようになった時の喜んだ表情が直に観れることです。

私が高齢者施設に在籍している頃に担当の利用者様に胃瘻をしてる方がいました。

その方は経口摂取をずっと希望しており、私が担当になるまで中々実現することが出来ていませんでした。自分が担当になって初めに考えたのが同じ立場になった時にどこから始めていけば無理なく経口摂取できるようになるかでした。好物をヒヤリングし、始めは蜂蜜を舐める所から始めました。看護師、言語聴覚士、栄養士などと会議やシミュレーションを重ね、状態に、応じて難度を上げていき、最終的にはソフト食が食べられるようになり、ご本人、ご家族共に涙を流して喜んでいた事を今でも覚えています。私自身も始めてソフト食をむせず食べれた時は小さくガッツポーズが出ました。

そしてその方が亡くなられた時にご家族の方が、「あなたが担当になってくれて本当に良かった。もう一度口から食べられるのを見れるとは思ってませんでした。本当にありがとう」というお言葉を頂き、この仕事をしていて本当に良かったと思いました。

2021年12月

10回生 松本駿

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

10回生の石川です。

卒業して、しばらくは福祉の世界にいましたが家族が増え、やむなく福祉から身を引き一般の仕事に就きました。人相手の仕事で高齢者や障害のある方にも時々出会うと、つい「どうしたら喜ぶかな」って考えている自分です。

現在は子どもたちと過ごしながら、自分のやってきた福祉の仕事をゆっくり子どもの幸せを考えながらその体制差を改めて感じ、介護の大切さを社会が認めるようになることが大事だと、医療と同じように福祉も大切であることをゆっくり子どもたちに話すことも多くあります。親になって、守るべき生活と責任を担うと、以下の保育や介護が人々の生活や人生になくてはならないものかと、保育士と介護福祉士の資格を取得した専攻科福祉専攻がターニングポイントであったと、今、気が付いています。

後輩たちへ、福祉の職場は、コロナ禍で感染予防対策をしながら目まぐるしく変化してとても大変な状況だと思えます。しかし、自分がいた職場は、一度も感染症が出ておらず、一人ひとりが責任を持った行動をしていることに感動しました。

また、そこに、ご利用者や家族の協力があり、この苦難をどうみんなでのりきるか一緒に乗り切っていることに安堵しました。「怒り」「笑い」の理由が手に取るようになるまで時間がかかりますが、最期に亡くなった命の尊さを初めて知り自分の祖父母ではないのに、大泣きをし、後悔をしたこともあります。

若い私にとって介護は、今の自分を支えてくれる思い出になっています。

ぜひ後輩の皆さんも、長い目でこの福祉の仕事で魅力を感じられたら、専攻科福祉専攻の学生であったことにあらためて感謝できると思います。そうでありますように。

2021年12月

10回生 石川正人

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

10回生の内藤霞です。

専攻科を卒業して保育園で勤務して10年になります。

今までは乳児クラスで複数担任で行うことがほとんどだったのですが、10年目にして初めての一人担任、あまり経験したことのない幼児クラスということもあって、毎日悩みながらも元気いっぱいの子どもたちと楽しく過ごしています。保育士になって大変なことや悩むことのほうがたくさんですが、子どもたちの笑顔や存在に癒やされる毎日です。介護の職には就きませんでした。が、実習に行った際に関わった利用者さんたちの笑顔や存在に癒やされていたのを思い出すと、子どもたちと関わることやお年寄りと関わることは年齢は違いますが、同じような気持ちを感じると思います。又、専攻科で過ごした1年はとても勉強になり、たくさんのことを学ぶことができ、介護に対しての思いやお年寄りに対しての気持ちなど、専攻科にいたからこそ感じる事が出来たことも多いと思うので、専攻科に進んでよかったなと今でも思っています。

2021年12月

10回生 内藤 霞



専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、10回生福井愛香里です。

私は豊橋創造大学短期大学部を卒業して、10年目を迎えます。現在は、愛知県内のあま市のケアハウスに勤務し80名の要支援者や要介護2程度の比較のお元気な方の支援に関わらせていただいています。

ケアハウスの皆さんは、自分の命の終わりをどこでどのように過ごすかを自ら決めており、長年住み慣れた我が家を離れてきています。それでも、コロナ禍が続くなかで、さまざま不安に出会うときがあり、そんな時は、じっくり話を聞いて一緒に考えよう心がけています。これも、大事な高齢者の自立支援の介護だと思っています。

以前、私は重症病棟の介護に携わった経験がありましたが、その時、医療が優先され、快適でその人らしい時間や生きがいのある時間がなく、ますますパワーレスしていくご利用者さんに何もしてあげられず、悲しい気持ちになりました。

だからこそ、目の前の高齢者方々の気持ちに寄り添い、元気なうちから入所して来られたご利用者に対してトイレ介助でも、自立や安全を考え、できるだけ自分で歩けるように配慮したり、認知症があって不安にならないように、見慣れたものを置いたり、話をじっくり聞いたり、どんな世界にいるのか関わったり、つまり、利用者の心身の状況の変化に気づけるようにこころがけています。

後輩の皆さん

専攻科福祉専攻は、人生のターニングポイントです。

みなさんが学ぶ介護は、決して、簡単ではないかもしれませんが、今後の人生に必ず役立つことになるはずです。

2021年12月

10回生 福井愛香里

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻 12 回生の斎藤良典です。

私は 2013 年に専攻科福祉専攻に入学しました。当時は学生 8 名の学生で全員、幼児教育・保育科から来た子ばかりでした。全員それぞれに面識があり、ある程度人間関係や関係が作られた中での専攻科のスタートでしたのでとても勉強しやすい環境であったと思います。先生たちとの距離も良い意味で近く、これもとても勉強しやすい良い環境のひとつだったと思います。

授業は座学だけではなく、実技や見学など、実際に利用者様と関わるなど、実際に見て聞いて、体験する講義も多かったように思います。それが実際に介護現場で働く際にとっても役立っています。現場で何かあった時や、基礎知識を尋ねられたり、実際に支援するうえで専攻科福祉専攻で学んだ知識がとても活かされています。学校で学んだ事は現場では通用しないと言われることもありますが、教科書に載っている事や講義の内容は支援する際に、知識としてとても必要な事であったり、支援の根底にあたりしています。根拠のある介護を行う為には、正しい知識があつての事であると考えます。その事から根拠のある介護を行う為にも、教科書に載っている事や講義から学ぶ事は現場でも通用することだと思えます。それがあつての現場での仕事や介護技術や知識であると考えます。

転勤のある仕事に今就いていますが、在学中の実習は障がい者から高齢者まで学びました。今後、障がいや高齢者施設で働く事になっても、どちらでも正しい知識を持って働くことが出来ると思えます。それはやはり、専攻科福祉専攻での学びが自分の基礎となっているからです。もし、今後壁に突き当たったとしても、専攻科福祉専攻同窓生を中心に組織された福祉の里という場所が自分を正しく修正してくれる事を信じています。閉科したとしても、専攻科福祉専攻に縁がある人が集まれば、いつでもどこでもそこが専攻科福祉専攻という場所になると思えます。

2022 年 3 月
12 回生 斎藤良典

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、13回生の金田美加です。卒業してNPO法人どんぐりの会に勤務して、8年になり、現在はグループホームのサービス管理責任者をしています。当法人はこの他に障害者就労支援B型、就労移行を行っている施設で18歳以上を対象としています。先天的な障害だけではなく様々な要因により、本来乳幼児期に発達すべき課題を18歳以降にも持ち続けているのが実情です。ですから、専攻科はライフステージの課題解決にむけた継続的なケアサービスにつなげていく視点が養われると改めて感じています。これは、専攻科福祉専攻で学んだからこそ、気づく視点です。

次に専攻科福祉専攻での思い出についてです。今のコロナ禍では、難しい体験を沢山させてもらい貴重な体験をさせてもらっていました。しかし、一部の私たちは、決められた集団行動についていくのが苦手な自分の為の気まぐれ行動してしまったことがあります。肝心の医療的ケアを受けている子どもの2泊3日のキャンプでの気球に乗ることなく、仲間3人と脱走し車の中で居眠りをして不測の事態を作り困らせた事がありました。今でも、申しわれないと思っていますが、先生は、「そんなことあった？」と忘れたふりをしてきていますが、胸が痛み続けています。

専攻科福祉専攻とは、大学祭に本社のパンを販売するコーナーを毎年作ってくれるので、ずっと卒業後も先生や毎年在校生と会うことができていました。在校生をみて「このような人が福祉現場に来ると困るなあ」などと思ったり、ご利用者さんに、無理やり、集団行動をとらせてしまい、上から目線で物事を勧めようとしてしまう自分こそが、集団行動が苦手であった、苦労させてしまった当事者であったと思い返し、原点にかえっています。気付けたことから学ぶこと、その時、わからなくてもあとあとで、気付くこともあると、大林先生は笑いながら言ってくれます専攻科福祉専攻がなくなり、大林先生も居なくなれば、謝る機会がないと気づき泣けてきました。

幼児教育・保育科、専攻科を卒業してから良かったことは、両方を勉強している事で視野が広がりました。発達や障害に合わせた伝え方、接し方、可能性を引き出すための環境のあり方が保育と介護でリンクしている所がありました。仕事でとても役立っています。

専攻科福祉専攻の最後になる在校生へ贈る言葉です。
どこに就職しても幼児教育・保育科で勉強した事、専攻科福祉専攻で勉強したことがとても役立ちます。様々な視点から、その利用者、園児を見る事が出来るので支援する幅が増えます。勉強した、3年間を存分に発揮してください！

私は、卒業して、ほんとに困った時、悲しい時、親身になって聞いてくれていた先生の存在の大きさ、色んなことに気づきました。専攻科福祉専攻を卒業して先生と出会い、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

これから、私は熊本に嫁ぎ、豊橋を離れますが、オンラインでのつどいの機会を遠距離から心待ちにしております。

専攻科福祉専攻の幕は、コロナ禍の中で閉じられますが悲しんでいる場合ではなく、いつも前向きな先生の姿を思い浮かべています。

本当に、心より感謝いたします。ありがとうございました。

2022年1月

13回生 金田美加

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は13回生の廣田瑞穂です。

私は、専攻科福祉専攻に入学する前に幼稚園教諭として働いていました。子どもを教育する中で、生きることについて考えるようになりました。それは、大好きだった祖母の死に直面。その後、元気でいた祖父の老いに戸惑ったことがきっかけでした。祖母の死に加え、祖父の老化は当時の私にはどうしても受け止められない現実にある中で専攻科福祉専攻に出会いました。

困惑していた私に、大林先生は「特に大切な人を亡くしたり、年老いて姿を見ると、なかなか受け入れられないのは、当たり前で恥ずかしいことではありません。専攻科福祉専攻でぜひ死生観を養ってください。」と言われた瞬間、ここで学びたい!と専攻科福祉専攻の入学を決めました。入学後、大林先生の授業のゲストに来られた故堀田先生(生と死を考える会、豊橋ホスピスの会)より『死ぬことは誰もが経験することであり、怖いものではない。』とその言葉を聞いたとき、「当たり前のこと」を私は受け入れられずいたのに気が付いて、涙が止まらなくなり、幼稚園教諭として人の始まりから専攻科福祉専攻で終わりについて学ぶことは、人間の一生を大切に生きること考えることになる、仕事の選択の仕方や生き方まで変わることができるのだと教えてくれました。いつか終わるならから、いつか終わるのだからと考えるようになり、どんな状況にある人もいい時間を過ごせるようにすること!が大切であるとも。「それが、介護の対象者ならなおさらのはず」、なかなか誰も教えてくれなかった当たり前のことを受け入れられず、あいまいにしてきた不安が希望に変わった瞬間でもありました。

その授業を受けてから私は、祖父の老いを受け止められ、関わり方が変わりました。今の目の前にいる祖父の姿から今まで生きてきた全ての姿を見つめられることができるようになりました。

卒業後は特別養護老人ホームに就職し、実際に看取りも行ってきました。その中でどうしたら患者様が終末期を明るく過ごせるか、相手の気持ちになり寄り添い考えてきました。大好きだった患者様が最後に手を握って亡くなっていったときには心からのありがとうが言えました。又、大好きだった祖父にもしっかりとお別れを言うことができました。

幼児教育から始まった人間への関心は、専攻科福祉専攻に来て、始まりがあれば終わりがある当たり前のことに向き合うことの価値を学び、私を元気付けてくれました。

現在、2児の母親になった私ですが、時折「命にありがとう」と感謝したくなる時があります。こんな気持ちにさせてくださっているのは、そこで命をゆだねた方々のように感じる、これが私の正直な気持ちです。

専攻科福祉専攻は今後の社会で最も必要な授業だと思います。増して、増えていかなければいけない保育士資格を取得した介護専門職を育てる必要な教育だとも感じています。人の一生を見通して見えてくるものは、「限りある命」を「どうよりよく生きていくか」、人の始まりと終わりに接して2児の子どもの母となってみて、今の子ども達がこの先大きな壁にぶつかった時、専攻科福祉専攻で受けた学びがあれば、自分自身でどうやって生きていくか、生きる術を見つけることができると思います。

専攻科福祉専攻科は、ただの介護を勉強するだけの場ではありませんでした。私にとっては生き方を教えてくれた大切な場所です。

2021年12月

13回生 廣田瑞穂

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻卒業後から特養や高齢者のデイサービスなどに3年ほど努め、現在は子ども向けの福祉事業、児童デイサービス、児童発達支援事業所に勤務しています。

私が勤務している児童デイでは、社の方針で障害があったとしても、ランドセルを放り出して子どもたちが、のびのびと活動できるよう、支援をしています。また、肢体不自由な子どもの中にはいるため、幼児教育・保育科で学んだ教育的な面だけではなく専攻科福祉専攻で学んだ介護技術も活かすことができ、3つの資格をまんべんなく活用できています。

専攻科福祉専攻での思い出・卒業して良かったことは、たくさんの福祉事業や活動に実践的に関わったことです。

夏に行った「難病の子ども、頑張り共和国おいでん鳳来のキャンプ」や京都の「東樹」に集合し、子どものおかれている現状とその支援の実践的なあり方の話を聞いたこと、大学近隣にある福寿園の障害者就労支援のレストランで食べたおにぎりが美味しかったこと、専攻科で知った「うめぼしの歌」が入社初日のデイサービスですぐに歌うことができ、職員さんにびっくりされたことなど、一つ一つの体験が今現在の私の仕事のスキルとして身につけていることが、たくさんあります。

今では、国家試験に合格しないと介護福祉士の資格はとることができなくなりましたが、幼児教育・保育の資格だけではなく介護資格をもてるというのは今後、強い力と自信になると思います。

私は一つの物事に長く取り組むことが苦手です。そのため、介護系だけではなく、保育という福祉系の仕事にも勤務できたため、福祉という業界で長く仕事を続けることができたと思います。

また、保育観点、介護観点はそれぞれどちらの業種にも共通する面があり活用することはできます。現に、介護で備わった技術は今でも、保育系に活かされています。卒業して、福祉の世界に進む人ももしかしたら一般企業に進む人もいるかもしれませんが、資格はもって使ってみると強みであることを知ります(笑)

大変だなー。しんどいなー。と思ったら一旦違う業種に飛び込んで、比較し感じてみるのもありだと思うし、保育、介護交互に務めてみるのもありだと私は思っています。

専攻科福祉専攻があったことで、1年の学びで人生が大きく変化していますので、本当にありがたかった、よかったと思います。

学んだ、すべての事を知識として活かせていけていることが、すごいことだと思います。

長く続いた、専攻科福祉専攻では、病気や障害をもって生活することが前提で生活をしている方々との出会い、体験は、今後私の人生に何かあったときにこそ、私自身の支えになるだろうとさえ思います。専攻科福祉専攻は自分の世界観を広げることができました。そんな出会いの数々をくれた先生、本当にありがとうございました。

専攻科福祉専攻の一学生として、長く続いた専攻科福祉専攻がなくなり、先生もこの大学からいなくなり、変える場所がない感じがして寂しいです。ですが、もっと今年度卒業する学生や先生の方が寂しい思いをしているはずです。私は、もしかすると、専攻科福祉専攻の閉科は、成人式的な感じだと受け止めようと思います。こうしたことをきっかけにつながりを広げていけたら楽しいなと思います。

本当にありがとうございました。

2022年1月

13回生 多賀糸 美里

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、14回生の中山彩です。卒業後は、社会福祉法人双樹会 自由の杜 で知的障がい者の自立支援をメインとする生活介護の生活支援員をしています。現在はユニットの副主任として生活支援の他にも新入社員指導や実習生指導にも携わっています。又、愛知県で初めての「障がい者公文（くもん）」を導入し、マスター指導員として入居者さんのより豊かな暮らしのお手伝いをさせて頂いています。

専攻科福祉専攻での思い出は、様々な施設やその職員さん、利用者さんと関わる場をたくさん作って下さったことがとても印象に残っています。自分の目で見えて体験して感じたこと・学んだことが今の仕事にしっかり活かしていると実感しています。

保育士と介護福祉士の資格を持つことの意義は、子どもから大人まで幅広い分野で働くことが出来、広い視野を持つことができるようになったことから保育と福祉を学べてよかったと思います。

最後の在校生の皆さんへのメッセージです。専攻科福祉専攻で先生達が経験させてくれた事は、この先の将来で必ず生きていきます。思いやりや心配りなど授業だけでは学べない道德の部分も含め、人として大切なことをも沢山教えてくれたと思います。その気持ちを忘れずに大切に持ったまま、豊橋創造大学短期大学部から巣立って行って下さい。いつか必ずどこかのタイミングで、専攻科福祉専攻で学べて良かったと感じる瞬間があるかと思います。

私自信は、先生達と出会い、そして専攻科福祉専攻の仲間と出会い、様々な施設の職員さんや入居者・利用者さんと出会い、本当に人生豊かな経験を沢山させて頂きました。

「福祉ってこんなにも素敵な仕事なんだ」と、今でも感じながら仕事に向かい合っているのは間違いなく先生方のお陰だと思っています。

専攻科福祉専攻がなくなってしまうのはとても寂しいことですが、私はここで学べたことを誇りに思います。大林先生、村上先生、本当にお疲れ様でした。ご多幸と益々のご活躍をお祈り致します。

2022年1月

14回生 中山 彩

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻 15 回生の深谷千洸です。

専攻科福祉専攻で過ごした 1 年間はとても忙しくとても早かったです。でもそれ以上に、楽しかった思い出がいっぱいです。今でも写真フォルダにはクラスメイトとふざけ合っている写真や先生たちと撮った写真がいっぱいです。私は仕事で大変な時にたまにそれらを見て元気をもらいます。

仕事をしていても専攻科福祉専攻で学んだ事が出てくると時々思い出します。

卒業してからも専攻科福祉専攻に進んで良かったと思うことがいっぱいあります。

なかなか会えない日々が続きますが、福祉の里を通じて、クラスメイトや先生、先輩後輩とも交流できれば、また新しい楽しい思い出が増えるのではとワクワクしています。

2022 年 2 月

15 回生 深谷千洸



専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻 15 回生の細井あやです。

専攻科福祉専攻に入学して、1 年と短い期間で慌ただしく過ぎてしまいましたが私にとって思い出深い 1 年でもありました。

専攻科福祉専攻では同期が 7 人と少なかったですが、その分先生方はより深く私たち学生と向き合ってくれました。

専攻科福祉専攻での思い出は学外演習です。たくさんの施設の見学やイベントの参加、実際にご利用されている利用者様との関わりを多く取り入れてくださったので、施設見学では就職先を探して迷っていた私にとって大きなヒントになりました。

現在は、在学中からご縁がありましたフラワーサーチはた楽でいで勤務しております。

こちらではお客様個人を尊重し、日中の過ごし方を選択制にし、お客様が 1 日のスケジュールを決めています。職員が一人ひとりお客様と関わりをもち、深く理解することで 1 日を楽しく、気持ちよくご利用していただけるよう努めています。卒業しても職場で専攻科福祉専攻の在校生との交流があり、懐かしさと共に初心を思い出させてくださったこともありました。

保育士と介護福祉士の資格を持つ自分達は人の一生を携わることができる素晴らしいことだと思います。このたびは専攻科福祉専攻が無くなってしまいましたが、先生方や友人との出会いは大切な宝物です。ありがとうございました。

2022 年 2 月
15 回生 細井あや

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻の15回生の牧野茉莉です。

保育分野を経て福祉を学ぶ専攻科福祉専攻に入学し、社会人になる前に人として大事なことを大林先生はじめ、先生方に学ばせていただきました。言葉にはできない真心や思いやり、人としてこうありたいな、という目標が見つかりました。専攻科福祉専攻がなくなってしまうことを聞いた時、とても寂しく感じましたが、専攻科福祉専攻で学んだことをこれから私自身が、誰かに伝えて行くべきだと思えることができました。専攻科福祉専攻で過ごした一年間を宝物として心にしまい、自信を持ってこれからも過ごして行きたいと思います。本当にありがとうございました。

専攻科福祉専攻の集いも参加させていただきありがとうございました。とても温かな気持ちになりました。これを機に色々な方々と福祉の里を通じて繋がりができたこと嬉しく思います。

2022年2月
15回生 牧野茉莉



専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

私は、専攻科福祉専攻 15 回生の丸地未紗です。

私は、卒業後、介護に行きたかったのですが、腰の手術をした為、一般企業に勤務しています。

私にとっては専攻科福祉専攻の 1 年は、とても思い出に残っています。中でも、腰の手術をした際には、わざわざ名古屋まで大林先生がお見舞いにきてくださったこと、今でも忘れません。

寝たきりだった私が 1 日どのように過ごしているのか、精神的な面を気づかせてくださったことは、今でも忘れません。学生みんなが仲良しで、今でも、連絡を取り合うたびに、専攻科福祉専攻のつながりを嬉しく思います。とても充実した 1 年間だったと思います。1 年間では足りないくらいとても楽しかったです。

今は、コロナ禍で学外演習などはできないと思いますので、きっと、ご苦労されていると思います。

先日は、福祉の集いに参加して、また皆さんで会えることが楽しみになりました。

専攻科福祉専攻がなくなるのは、寂しいですが、私たちの先生になってくれてありがとうございました。

20 年間、本当にお疲れ様でした。専攻科の最後の在校生の皆さん、最後を飾ってくれてありがとうございました。

2022 年 3 月

15 回生 丸地未紗

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私」

18回生の早田涼佑です。

私は、専攻科を卒業して2年くらいになります。今は豊橋の障害者支援施設に勤めています。利用者さんと楽しく日々を過ごしています。こうした生活があるのは、専攻科福祉専攻との出会いがあっての今だと思います。少し私のいきさつを話しますと、豊橋創造大学短期大学部へは「保育園・幼稚園の先生」になりたくて入学しました。幼児教育・保育学科（以下「幼教」）卒業2か月前まで「保育士」を目指していました。ですが、授業やゼミでお世話になった先生との相談の中で「保育士」だけだった視野を変えてくれました。専攻科の学生になるための手続き期限ギリギリまで悩み、「専攻科福祉専攻」へ進学を選びました。

ふと振り返ると、様々な出会いがありました。

当時、私が在籍していた年度は、学生は7名でした。幼教の頃と比べると、1クラスにも満たない人数でした。授業では、課外学習で施設等に出かけたりしていました。今の社会情勢では、難しいかもしれません。その中で特に印象に残っている出来事があります。とあるグループホームに訪れた際に、娘さんがグループホームへ入所することでご本人とご両親がいらしてました。「入所させる側（娘さんのご両親）」の思いを聴かせていただく機会があり、お辛いことなど、ありのままに話してくれました。感想を求められ、自分が思ったありのままを話していると、言葉が詰まり、涙があふれてきました。ご両親の思いに直面し、とても自分がどこか情けなく感じ、悔し涙だったと思います。「人の痛み」を痛感したように思います。このように、施設の利用される方や、保護者の方々、施設に勤める施設の方々、数えきれないくらいの方にお会いし、色々な人間ドラマを見させていただきました。

「人の痛みを知ってこそ、本当に人に優しくできる」対人援助職の一人間として、様々な出会いで気づいたことを心に留めておく。それこそが専攻科福祉専攻があったという証になるものと思います。

2021年12月

18回生 早田涼佑

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「卒業してからの私

私は、専攻科福祉専攻 18 回生の日柴喜ゆいです。

私は、愛知県三河青い鳥医療療育センター に支援員(介護)の仕事だけでなく保育士としても勤務しています。

最近、子どもたちはコロナ感染者が増えてきたため外泊ができなくなってしまい、子どもたちもストレスが溜まり、トラブルが増える予感がします。

その中で、優しく子どもたちの気持ちを受け止められるようにしていかなければならないと考えています。またお休みの日には季節ごとの行事をしたり、映画をみたり準備をしています。

落ち込む日もありましたが、「ゆいちゃん」って子どもたちが毎朝扉まで迎えに来てくれるので頑張っています。

子どもたちから一番年齢が近いので、いろいろな相談もされ、中学生の男の子から『相棒』って呼ばれてます。

専攻科福祉専攻の思い出は、毎日が思い出です。よく、喋り、よく、笑い、食べたり、寝たり、その繰り返しでした。いろんな所に行きました。特に、難病の子どもキャンプでは、かき氷担当で、長い列に並ぶ子ども達の楽しげな顔が今でも忘れられません。専攻科福祉専攻は、自分の居場所があり、第2のお家のような感じでした。

幼児教育・保育科と専攻科福祉専攻を卒業して良かったことは、まずは、コミュカ(コミュニケーション能力)が up したことです。自分の言動を客観的に捉えることができるようになりました。また、障害の方への偏見もなくなったこと、障害は、周りの環境のあり方が、大切であること等の障害の捉え方です。

専攻科福祉専攻に入学するきっかけは、祖父の死でしたが、死についても、死に向かう時間こそ向き合える時間であることを学び、また後悔することがないような行動がとれるようになったかな?と思っています。

最後になる在校生は、私達と違い、コロナ禍の中で色んな活動制限を受けているかと思いますが、先生方が一番寂しい思いをしていると思いますので、楽しい時間を一緒に創って欲しいと願います。

最後に専攻科福祉専攻で過ごした 1 年は最高な時間でした。たくさんの方の経験させてくれてありがとうございました。

大好きです。

2022 年 3 月

18 回生 日柴喜ゆい

専攻科福祉専攻(介護福祉士養成課程)への思い

「最後の卒業生としての思い」

20 回生の三ツ矢華奈子です。

私は専攻科でたくさんの思い出を作りました。初めて学ぶことが多く、どれも新鮮で毎日楽しかったです。学ぶといっても勉強だけではなく、人との繋がりやコミュニケーションなども学びました。専攻科では特に人に関わることを学べたと思います。それは、20年の歴史があるからこそ多くの人と関わる機会があったからだと感じています。

また専攻科は他の学科とは雰囲気少しゆったりとしていて、学び場でもあり家という感覚もありました。一緒に勉強をした5人は本当に家族のようにも思えました。だからこそ、畑で野菜を作ったり、課外学習で船に乗ったりと座学以外の授業がとても楽しかったです。今思うとほんとうに学校を楽しんでいたなぁと感じます。

ただ楽しい学校生活だけではなく、長期の実習が大変だったと思いました。今までは1週間~2週間の実習でしたが、約1ヶ月の実習もあり、できるのか不安になりました。実際、実習ではパット確認や食事介助、就寝介助など今まで体験したことのないことばかりで戸惑いました。大学で演習をしましたが、やはり実際に触れて体験するとそれぞれ違って大変でした。しかし、就職した先輩方を見てとても堂々としていて、楽しそうに接する姿がカッコイイと思いました。なので、大変だと思うばかりではなくそこにやりがいや楽しみをみつけたいと思いました。

最後に私たちで専攻科は閉科となりましたが、1年という短い期間で多くの出会いや学びがありました。そう思うとやはり寂しい、なぜなくなってしまうのかと感じます。だからこそ、福祉の里を通してこれまでの繋がりを大切にできたらいいなと考えています。また就職してまだまだ分からないことがたくさんあるので、先輩方の姿を思い出してこれからも頑張っていこうと思います。

2022年10月

20 回生

三ツ矢華奈子

創造学報

Toyohashi Sozo University News

地域・職業教育・人間教育

2022.春号
VOL.45



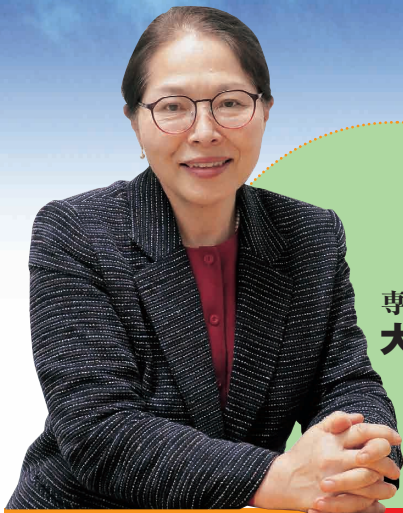
- P1 — **特集1** / 豊橋創造大学短期大学部専攻科福祉専攻20年の歩み
活躍する卒業生たち
実習施設と実習指導者から
同窓生組織「福祉の里」を設立
- P3 — **特集2** / 地域の健康を支える活動
地域の健康支援のための公開講座(特定研修施設との連携講座)
スポーツ傷害予防教室
高度リハビリテーション人材育成センター第3回特別講演会
- P4 — **特集3** / 地域の未来を創造する活動
業界のビジネスリーダーから学ぶ特別講演会
SOZO起業塾同窓会発足
SOZO起業塾OB向け拡大講座
- P5 — 研究室から
- P7 — SOZOトピックス



専攻科福祉専攻生活支援技術Ⅱ「経営栄養の演習」の様子

地域の未来を創造する活動

豊橋創造大学短期大学部専攻科福祉専攻20年の歩み



専攻科長を務めた
大林博美教授

短期大学部専攻科福祉専攻が、2021年度(2022年3月31日)で閉科します。2002年の開科から、福祉における地域課題に取り組み、介護福祉専門職を育成し、20年間で229人の卒業生を輩出しました。専攻科長を務めた大林博美教授に、20年の歩みと卒業生への思いを伺いました。

地域の介護福祉職の育成をめざす

専攻科福祉専攻は、保育士資格の保有者が、1年間の学修で介護福祉士の取得を目指すことができる専攻科(定員20人)として2002年に発足しました。初年度の入学者は20人。8割が社会人で、親の介護が始まる世代が多く、半数が40代以上でした。1回生は、今後の就職先を広げるためや、女性の資格として興味を持ったなど、様々な思いを抱いて入学し、卒業後は、ほとんどが介護の現場に就職しました。その後も1回生とは、様々な形でつながっています。

2回生以降は、「保育の仕事は今しかできない」と、専攻科卒業後、保育の現場に就職する学生が多い年もありました。介護福祉士の免許をもって保育園に就職し、統合保育に関わり、障害児の発達支援に携わっている卒業生もいます。

これまでの20年間で、229人の卒業生を社会に送り出しました。



第1回「福祉」情報展(2004年)開催

学び、考え、体験を通して、1年間で育成

専攻科福祉専攻では、人間の可能性を引き出す知識と技術について、子どもからお年寄りについて教えてきました。

その人(子)がおかれている環境を見据え、生活力に注目し、一人ひとりの「尊厳」を考えて支援していくことを伝えてきました。学生たちは、「生きていくうえで何が大事なのか」を学び取る機会になったと思います。

人は一人では生きていけません。人としてより良く生きていくためには誰かの支援が必要となり、その誰かによって、人生の質が変わります。実際には、家族だけでは負いきれないことがあります。こうした状況の中で、より良く生きるためには「自立支援」が必要となり、その人らしい人生を歩ませることができるのが、介護福祉士であると説いてきました。

専攻科福祉専攻(1年課程)の学生には、ベースに保育があり、人と人のかかわりの中で育んできたコミュニケーション能力などが身に付いており、介護福祉士を目指すうえで、大きな力となっています。このように専攻科福祉専攻は、保育士と介護福祉士の専門性を有する人材育成ができたと思います。



「福祉」情報展 2007 特別企画「心の創造展」

「尊厳」を護るべき人に

老いも死も当たり前のことで、始まりがあれば終わりがあります。福祉職は、人の始まりから終わりまでに携わることができる職業であり、自分の人生の中でも活かしていくことができます。

学生たちは専攻科福祉専攻の学びのなかで、常に命の「尊厳」と向き合ってきました。その体験を活かし、「尊厳」を護るべき人、護り得る人になって欲しいと願っています。

20年間、福祉の心を育てる教育をしてきました。コロナ禍の今日にあっては、人間の生きる価値を大切にできるスペシャリストとして、それぞれの現場で自信と誇りをもって活躍して欲しいと願っています。



難聴の子供に音楽届け隊 目で音楽を見るプロジェクト



「介護福祉基礎学」の授業で実施した地域貢献活動

卒業生の声・同窓生の会「福祉の里」スタート

活躍する卒業生たち



「尊厳」を守る介護をつなげたい
専攻科福祉専攻1回生
村上実奈さん

豊川市
特別養護老人ホーム
ジャルダン・リラ
教育
研修事業所所長



11年間、市内幼稚園に務めたあと、開科したばかりの専攻科福祉専攻に入学しました。将来的に担うかもしれない家族の介護を考え、勉強しておきたいという思いと、1年間で学べること、母親が勧めてくれたことも力になりました。介護の仕事が自分に向いているかどうか、1年かけて考えようと思いました。専攻科の1年は、とても充実したものでした。施設見学や実習で出会った利用者さんを通して、大林先生の講義で学んだ、自立支援のむずかしさと大切さ、「尊厳」の在り方が、今の私が取り組む介護の根底にあります。介護の現場で19年。受け入れ実習施設の担当者として、学生たちと向き合うようになりました。私たちが専攻科福祉専攻で学んだ倫理観と「尊厳」を守る介護を、私たちに続く世代につなげたいと思っています。



学びを生かして、人と向き合う
専攻科福祉専攻13回生
石原美加さん

豊川市
障害者就労 どんぐり
グループホームの
サービス管理責任者



専攻科福祉専攻を卒業したあと、障害者就労施設の「どんぐりの会」に就職し、現在、グループホームのサービス管理責任者をしています。弟に障害があり、親の大変さを見てきたので、少しでも親を支えることができたらと考え、介護福祉士の資格取得を目標に、短大部の幼児教育・保育科に入学し、専攻科福祉専攻に進みました。就職をしてからも、先生たちのバックアップを感じ、創造大で学んだことが強みになっています。きついことがある仕事ですが、利用者さんが今できることを維持するだけでなく、成長を感じられたときにやりがいを感じ、笑顔になってくれたときには喜びがあります。「やりがいは自分で見つけるもの」と思っています。そのやりがいを見つけた時に、「このために頑張ってきたんだ」とわかります。今、社会福祉士の資格を取りたいと思っています。利用者一人一人にあわせたライフプランを提案できたらと考えています。

実習施設と実習指導者から



「今後の活躍に期待」

特別養護老人ホーム
王寿園
介護主任

加藤英朗さん

「学生さんを受け入れるということは、私たちにとっても良い刺激になりました。学生さんたちの利用者さんへの視点が新鮮で、私たちが見落としていた点などに気づかせてくれました。学びたいことがいつもしっかりしていたので、ともに仕事をする仲間として私たちも安心して受け入れられました。実習中も、学生さんと先生との間で細やかなやり取りがあり、私たちも気持ちよく指導でき、勉強にもなりました。今後も、何かしらに携わらせていただきたいと期待しています。」



「地域を支える福祉職に」

特別養護老人ホーム
王寿園
施設部長

石原篤志さん

「介護福祉を学ぶ学生さんたちが現場に来てくれることで、僕たちも一緒に勉強していくという気持ちで対応しました。実務研修がいろいろあるなかで、事前にきちんと準備をしてこられ、目標をもって実習に臨む姿に、やる気と意気込みを感じていました。この先5年間、一番お年寄りが多くなる時代になります。人の人生を預かる仕事ですから、やりがいがありますが、大変さもあります。卒業生の皆さんには、地域を支える福祉職として活躍していただきたいと思っています。」

同窓生組織「福祉の里」も設立。絆をつなぐ。

専攻科福祉専攻の同窓生の有志が発起人となり、2月12日に「同窓生のつどい」が開かれました。また、つどいでは、同窓生組織「福祉の里」の設立が発表されました。介護福祉職をはじめとする様々な現場で活躍する同窓生の絆をつなげ、エッセンシャルワーカーとして互いに支えあい、活動していこうと、誓い合いました。大林博美専攻科長は「同窓生同士の継続した学習や仕組みを設け、卒業生同士で刺激しあい、保育士・介護福祉士のプロフェッショナルとして成長し、福祉職としての更なる活躍を期待しています」と贈る言葉が述べられました。



